

開かれゆくキャンパス 1

「国際学生懇談会 in Hiyoshi」

「国際学生懇談会」開催にあたって

経済学部教授 小瀧昭夫

2003年12月12日(金)18時からのシンポジウムは、国際センターの協力を得て、雨模様の中、日吉の学生はもとより、矢上や三田やSFCの学生も参加の下で、和やかな雰囲気で行われました。マリ・ガボリオ経済学部助教授の開会の挨拶ではじまり、司会の長田佳子君(経3)にバトンが渡され、パネリストのみなさんが、順々に留学の目的や言語や生活習慣での失敗例や成功例を話し、それからそれぞれの留学地と自国の大学教育を比較検討して、これからの大学教育に何が必要か、提言をしていただきました。そして、フロアからの質問にも率直に答えていただき、2時間のシンポジウムは終わりました。交流・連携セクション所属の私の閉会の辞のあと、飲物とお茶菓子で懇親会が行われ、21時まで語り合いました。参加者は、39名(内10名が教員)でした。

留学生のそれぞれの個人的な経験談は、大変興味深く拝聴できましたが、このレポートではそのほんの一部を掲載させていただき、少しでもシンポジウムでの話が垣間見えますことを望んでいます。

「国際学生懇談会」の意義について

経済学部助教授 マリ・ガボリオ

ヨーロッパやアジアの外国人学生と、そこへ留学した日本の学生を一同に会したこのシンポジウムは、いろんな経験や異なった見解を付き合わせる貴重な機会でしたし、話されたさまざまな点 異国の地に溶け込むための困難なこと、異なった教育体制の比較、今日的な要請に応じた高等教育体制への提言、外国語を習得するための戦略など について一緒に考えることができました。

外国人であれ、日本人であれ、慶應の塾生を中心としたこの懇談会のおかげで、この主題に関心を持った参加学生たちは、自由に質問することができました。

この懇談会は参加された皆さんに外国語の習得の重要性を自覚させたことは疑う余地はございません。外国語の習得は、単に他国の文化を発見したり、その国の人々とコミュニケーションするための手段になるだけでなく、その国の歴史や言語や習慣を知らしめ、将来の職業へのさまざまな可能性を拓くための補足的な教養を外国で獲得し、より批判的になることができるのです。

私たちは、あの晩のシンポジウムとそれに続く大変にぎわった懇親会での外国人留学生と日本の学生たちの交流が、さらに深まりさらに建設的になっていきますよう心から願っています。最後に、このシンポジウムに参加されたすべての人々と日吉・



国際学生懇談会 in Hiyoshi

*会場の雰囲気再現するために、言葉遣いはできるだけそのままにしてあります。

(ガボリオ) 私は経済学部でフランス語の授業を担当しているマリ・ガボリオと申します。この懇談会を主催して下さった本大学の教養研究センターの交流・連携セクションの一員でもございます。

この懇談会はこのセクションの一貫で、国際センターと留学生を結び付けるために何かをしたいと思い、同じセクションにいらっしゃる経済学部の小瀧先生と一緒に準備を進めてまいりました。今日のために三田ならびに日吉の国際センターに協力いただいて今日はこんなふうになりましたので、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

これから「海外留学から学んだこと」というテーマについて話をさせていただきます。ここにいらっしゃる学生の中には留学の経験がある方、または留学を希望している方がおそらく多いと思いますので、これから話をさせていただくことは大変参考になることと思います。残念ですが、お天気のせいでしょうか、あるいは年末忙しい中のことでしょうか、参加者がかなり少ないので、今日は来てくださりまして本当にありがとうございました。

それで、とにかく今日はパネリストの皆さんと会場にいらっしゃる皆さんが親交を深めてくださるとともに、積極的な意見交換が行われることを願っております。これから先はパネリストの皆さんにお任せしたいと思います。

本日、司会を務めてくださる長田佳子さんです。今日はどうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

(長田) ただいまご紹介いただきました経済学部3年の長田佳子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日はお忙しいところお越しいただき本当にありがとうございました。会の流れをまず説明させていただきたいと思います。まずパネリスト紹介とともに、それぞれ留学経験の発表、また意見交換をします。各国の教育システムについての発表、意見交換、その後に質疑応答を30分間行いたいと思います。

ではさっそくですが、パネリストの皆さんの紹介をさせていただきます。

経済学部4年、吉野慶一さん。国立シンガポール大学に1年間、交換留学をしていました。前田陽一さん、同じく経済学部4年です。昨年、エセック経済商科大学院大学に交換留学生として1年間行っていらっしゃいました。経済学部1年のベ・ヘリさん、韓国からいらっしゃいました。日本語コース、ドイツから来ましたマリア・ズザンネ・フメルさん。中国から来ましたジャン・リナさん、法学部1年です。フランク・ビドゥさん、商学

部1年生、フランスから来ました。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

ではまず、パネリストの皆さんがどのような目的で留学したのかをお話願います。

(吉野) シンガポール国立大学に2002年の7月から2003年の7月まで1年間留学していました吉野と申します。自

分はバックパックで旅行するのが好きで、いままで20カ国以上回っていたのですが、いつもアジアを拠点に回っていました。アジアの国を自分で回るうちに、もっともっとアジア経済について知りたいと思いました。でも、慶應大学で見られるアジア経済についての資料というのは限られていて、やっぱり現地に行ってアジアの経済を学ぶのが一番かなと思ったのでシンガポールを選びました。

もうひとつシンガポール大学に惹かれた理由は、欧米のハーバード大学とかスタンフォード大学とかとアライアンスを結んでいて、授業にそれぞれの大学とのビデオカンファレンスみたいなものを取り入れています。そういう意味ではすごく発達しているのでシンガポール大学を留学先に志願していました。

(前田) フランスのエセック経済商科大学院大学に2002年の9月から2003年7月まで交換留学をしていた前田と申します。僕の留学の目的をシンプルに言ってしまうと、大学時代に何かひとつのことにチャレンジしてみたかったということがありました。フランス語の方も結構頑張っていましたし、僕も海外の生活を経験して一回り自分が大きくなれたらいいなと留学の方も考えました。

(ベ) 韓国のベ・ヘリと申します。私が日本に留学することを決めたのは、韓国の大学の1年生のときでした。植民地の歴史のある韓国の場合は、経済の実践が結構、日本のことを基本につくられたものが多いので、実際に日本に来てそれについて勉強したら、もっと深く勉強することができるんじゃないかなと思い、日本に留学することを決心しました。

(フメル) フメル・マリアと申します。2003年4月、ドイツのベルリンから日本に来ました。いま、慶應大学の日本語コースに参加しています。日本への留学を決めたのは、日本語能力を高めるためです。それだけでなく、日本の文化とか政治とか経済についても、もっと詳しく勉強したいと思っていました。私の



長田佳子(経3年)

大学の授業にはもちろん文化と政治制度についての授業が含まれているんですけども、私の考えは日本でもっと詳しく経験できるということです。だから、1年間、日本に留学したいと思いました。

(ジャン) 私は中国から来ました。名前はいろいろあるんですけど、日本の名前は姜麗娜キョウ・レイナと申します。一応、国籍は中国なんですけど、



ジャン・リナ (法1年) 中国

ベさんと同じ民族で朝鮮族という民族です。私は朝鮮族で、延辺という地方に住んでいたんですけど、そこでは昔、日本の影響がすごくて、いまだに外国語は日本語を勉強している学校が多いんです。私も中学校から高校まではずっと外国語は英語じゃなくて日本語を勉強しました。

日本に来た目的はふたつあって、ひとつは今まで8年以上も日本語を勉強して、読み書きはできるんですけど、話す力、会話力は全然、ゼロだと言ってもいいくらいなので、もっと自分の日本語力を磨きたいということもあって。もうひとつは、一応、中国で大学に入って経済の方を勉強したんですけど、どうしても合わなくて、もうちょっと違う専門分野の知識を勉強したいという気持ちもあって、また、外国に留学して視野を広げたいということもあって日本に留学しました。

(ピドゥ) フランス人のピドゥと申します。僕はまず自分の目的についてちょっと話したいと思います。自分はフランスの大学で生理生物学を専攻していたんですけど、自分にあまり合わなかったということで辞めました。そして、国際社会とかグローバル企業に興味があって学ぼうと思ったときに海外で外国語を覚えなきゃいけないと思いました。そこで、自分は日本に行って日本語を勉強し、受験をして、いま、慶應大学に入りました。

(長田) 留学して自分がこう成長したとか、得たものは何だと思いますか。

(前田) 僕は、考え方というかそういうのが非常に柔軟になったなということが一番思います。普通、授業はずっとケーススタディーというものを通してグループワークでやっていくんですけども、チームを組む人間がドイツ人だったりスペイン人だったりフランス人だったり中国人だったり韓国人だったり、本当にいろいろな国の人とケーススタディーを一緒に解いていくのです。その人たちの見方が文化に根差したものであるのかどうかというのはよく分からないんですけども、やっぱりみんな本当に違う考え方をして、それをいかに理解してみんなで作るものをつくるかという作業をずっとしました。本当に自分の考

え方だけではなくて、6人いれば6通りの考え方があるということ、身をもって体感してきましたので、やっぱりいろいろな人の見方というか考えを理解するような柔軟性が付いたんじゃないかなと思います。

(長田) 皆さん、ありがとうございました。それぞれ、いろいろな経験をなさっていると思いますが、いままで住んでいたところとは違う価値観や違う尺度で価値観が計られる場所に住むことによって、やはりそれまでとは異なった考え方や見方ができるようになるのではないかと思います。

では次に、外国人留学生と日本人留学生の経験から、留学した国と自分の国の教育システムを比較してもらい、今後の大学教育には何が必要かということ提言してもらいたいと思います。

(吉野) まず、シンガポールの教育制度と日本の教育制度の比較について話したいと思います。日本の大学は4年制ですよ。それに、日本に限って言えば大学に行くということすごく難しいことではなくて、望めばほぼだれでも大学に行けるというのが現状です。それに対してシンガポールは、大きさに言うと東京の23区ぐらいなんですけど、大学が3校しかありません。それがすべて国立大学です。

まずひとつ目の大きな教育システムの違いは、日本は大学が4年なのに対して、シンガポールというのは原則的に3年です。3年の中で成績優秀者の5%とか10%だけが、直訳すると「栄誉」とか「名誉」という意味なんですけど、「オーナー」と呼ばれる4年生に行くことができます。これはほぼ例外的なものなのです。

授業についてですが、日本の授業というのは、大教室が多くて、原則的に言うと、大学2年生までは教養重視、大学3年生からは専門科目重視というような風潮があると思いますが、

シンガポールは1年生から専門科目を学んでいきます。

日本の授業の1コマというのは週1回90分取られていると思うんですけど、シンガポールの1コマというのは合計で週3時間あります。そのうち2時間がレクチャーで、大教室の講義です。残りの1時間がチュートリアルといって、少人



前田陽一 (経4年)



吉野慶一 (経4年)

数の20人ぐらいが1つのクラスになって、レクチャーで学んだことを確認する、応用する、ディスカッションします。

シンガポールの学生は、そのオーナーという4年生に行けるチャンスがあるのでみんなものすごく勉強します。勉強といったら日本人の大学生の比にならないぐらいです。進学率がだいたい10%~15%なんですね。だから、もう大学に入っている時点でかなり優秀な人なのですが、その中でもさらに5%とかのオーナーに行くために、授業中もみんな自分から発言して、先生からいい評価をもらうための競争というのが恐ろしいほどあります。

その点で言えば、僕の正直な感想ですが、本当に勉強する人にとってはものすごく知的好奇心を満たしてくれるというか刺激的というか、周りがみんな1年生から勉強しているのでいい環境になると思います。また、日本の場合はゼミはありますが、それ以外、たとえば2年生までは基本的に一方的なレクチャー、講義しか受けていないのに比べて、シンガポールは必ず1科目につき週1時間の少人数のディスカッションというのがあるので、授業時間もシンガポールの方が1科目につき2倍だし、習熟度というか、1年たつてその科目にどのくらい精通するかというとやっぱり2倍くらいの開きがあります。

ほかの教育制度の特徴としては、日本だったら大学の先生が学生に評価を付けるだけですが、シンガポールでは学生が先生に評価を付けます。これは1年に3回、4回行われて、もちろん先生には匿名です。オンラインで、ほぼ強制的にやるようになっていますが、先生の方も学生の評価いかんで来学期以降の自分の持てるコマ数というのが決まってしまう。だから先生にとってもいい授業、分かりやすい授業というインセンティブが働くので、毎回、毎回、先生は新しいレジュメを用意してくるという面もすごくいいと思います。

こうやって話していると、シンガポールの教育制度の方が全然いいかというような気もするんですが、日本の授業を受けてきた中で僕がいいと感じたのは、日本だとゼミに入って1科目ですけど、ひとつの専門分野に対してもものすごく深い知識を付けることができます。シンガポールだと全部の科目にチュートリアルが付くから、全部の科目の習熟度は高くなるけど、逆にそういうのでいっぱいいっぱいになっちゃって、自分が本当にやりたい授業を自分が時間を割きたいときに割けないという点があります。日本のこのゼミの制度というのも一方ではいい面もあるのかなと思います。

これからの大学教育に何が必要かということですが、あまり具体的なことは分からないのですが、ひとつ言えるのはいまみたいな一方的な講義という授業じゃなくて、何らかの形で双方向的な、学生も参加できるようなチュートリアルディスカッションみたいな授業を、ゼミだけじゃなくて、もう少し設けてもいいんじゃないかなと思います。特に語学の授業では、もっともっと学生が自ら参加できるような授業づくりをしていていただきたいと思います。

(前田)フランスでの授業の体系なんですけど、グループで組んで常にケーススタディーを毎回やって、毎回レポートを出して、だいたい10回授業があるんですけど、そのうちの1回か2回はプレゼンテーションをするという感じでした。

授業の時間ですが、1授業が3時間で、常にずっとケーススタディーの答え合わせや、みんなでディスカッションして終わります。先生からは理論を教えてもらったことはないです。先生の方から最初に授業に入る前に分厚い本を渡され、それを勝手に君たちでやりなさいということでした。ケーススタディーをやって、ずっと1年間過ごすという感じでした。

ケーススタディーの方はハーバード・ビジネススクールのケ



ースタディーも使っていますし、ロンドン・ビジネススクールのもも使っています。非常に難しく、本当にケーススタディーに関しては、毎回、6人で僕の部屋に集まって朝4時ぐらいまで話し合いをして、9時に学校でレポートを出してディスカッションし、それからみんなでビールを飲みに行き、それでまた夜9時ぐらいにみんなで集まってケーススタディーをやり、4時に帰って寝るとか、すごく厳しい感じでした。

こういう授業というのはみんなで話し合うことでビジネスについての知識が付くというだけでなく、だれかがリーダーシップを取らなければいけないし、いかにリーダーシップを取るのがとか、リーダーシップとは何かとか、そういったものを考えさせるような、そういった授業でしたので非常に面白かったです。

これからの大学教育には何が重要かということについてですが、日本の授業というのは先生から大教室で教えてもらうだけという形式が多く、学生は大学を出て企業に入り、そこでまたゼロから教育してもらえという形だと思います。

日本ではいま、企業のマーケットが非常にグローバルになっているとか、また「物余りの時代」といわれていて、企業が企画したものがそのまま売れるというわけではなく、本当に消費者のニーズとかそういったものをつかんで、商品を売っていかないといけないのだとしたら、たとえば国際的なものの考え方、いろいろな人の考え方を理解できるような柔軟性が求められたり、もしくは自分でものを考えて何か提案をする力を求められたりすると思います。効率化というか、日本の社会が求める大学生というのがどんどん変わってくると思いますので、社会の変化に対してちゃんと対応できるようなシステムはこれから必要になってくるんじゃないかなと思います。

フランスの大学では1年間、研修というインターンシップが義務付けられています。僕のフランス人の友達で、ソニーに1年間インターンシップに行っていた人がいるんですけども、その人は日本のソニーに来たはずなのに、ソニーの方でマレーシアの部署に1人加わってほしいということになり、マレーシアに派遣されたりとか、面白いケースもありました。また、その人はフランスの大学に通っているのに、日本のソニーでインターンシップができるということや本当に国際的なバックグラウンドを身に付けることができる。また、さらにビジネスの世界で1年間もまれることで、自分でものを考えて提案するという能力も付くと思いますし、これは本当に面白いシステムだなと思います。

(ベ) 韓国の教育システムは日本とは大きくは違いません。ただし日本の教育でいいなと思ったのは専門学校と大学のゼミのシステムですね。また、韓国には実際、4年制の大学と短大みたいな2年制の大学がありますけど、技術的な面では専門学校があればもっといいのではないかなと思いました。それと、

韓国はインターネットの文化が日本よりもっと普及されていますけど、実際に先生とオンライン上で何か共有したりそういう機会が多いですね。日本はそれがちょっと足りないなと個人的にはそう思いました。

(フメル) ドイツの教育制度ですが、小学校から高校卒業まで13年かかります。そして、大学に入るとき、入学試験を受ける必要がありません。しかし、卒業の成績があまりよくなければ、目指している専門の勉強ができない可能性もあります。大学に入るときふたつの決まりがあります。それはふたつの専門、またはひとつの専門とふたつの選択科目を選ばなければなりません。たとえば私の場合、ひとつ目の専門は日本学、もうひとつの専門はアラビア学です。しかし医学または法律を勉強すればそれだけでいいです。

大学の授業はふたつの部分に区分されています。ひとつの部分はレクチャーという形の授業です。その授業の中には教師だけが学生に知識を伝えます。ふたつ目は練習みたいな種類の授業です。その授業の間、学生たちは自分の意見を言って教師に質問をします。普通はレクチャーに参加すれば、練習にも参加しなければなりません。

またコースの決まり、そして時間は分野によって違います。たとえば法律の場合、授業は10時から8時までの授業ですけれども、外国語を習うと授業は8時に始まります。このようにドイツの大学の制度は一様ではありません。州によっても大学の制度は若干違います。ドイツは2年くらい前にマスターというディグリーを取り入れようとしたけれども、残念ながら失敗しました。このようなことから、ドイツのある大学からほかの大学へ移ることがあまりできません。

(ジャン) 大学教育では、まず大学に受かる前の話をちょっとしたいのです。皆さんもご存じだと思うんですけど、中国には56の民族があるんですね。55の民族は少数民族として、もうひとつの民族、漢民族が人口の大部分です。少数民族は大学の試験についても、高校が関わっています。高校試験というのがあるのですが、少数民族ですとそこで自分が得た成績にプラス5点してもらえます。それは漢民族よりはちょっと得た点じ



ベ・ベリ(経1年)韓国



マリアズザンネフメリ(日本語コース)ドイツ

開かれゆくキャンパス「国際学生懇談会 in Hiyoshi」

やないかなと思います。

そしてもうひとつは、少数民族はもし自分の言語があったら、それをずっと勉強することができるんですね。それを勉強すると同時に、小学校2年生から中国語を同時進行で勉強します。そして中国語を高校までずっと勉強して、高校を卒業して大学に進学するときは、自分が住んでいる民族の範囲から、ほかの地方の大学に行く可能性があります。大学に入ったら全部、講義の言葉は中国語です。

高校までは、もし自分の少数民族の地域にいたら、全部、自分の民族の言葉を使いますが、大学にいったん入ったら、全部、中国語です。先生も中国語で講義するし、クラスメートも漢民族の方が多いので、ふだん使われる言葉は中国語になります。それが少数民族に対しては少し難しいことだと思います。

(ビドゥ) フランスの教育システムがどういうものかちょっと説明したいんですけど、フランスの高校にいる人は、だいたい3年生は自分がメインとして勉強する科目を選んで統一試験を受けます。科目というのはだいたい文学と社会学と経済学。あと理系は生理学、生物学と数学。ほかの技術の方もいろいろな試験があるんですけど、だいたいその3つの中で選んで、あと、バカロレア(Baccalaureat)という統一試験に受かったら大学に進

学することができます。それはだいたい全国のどこの大学にも進学することができます。ですから、フランスの教育システムというのはみんなが平等で、大学のレベルは一流の大学があるんですけど、だいたい一般的にどこの大学にでも入れます。



ビドゥ・フランク(商1年)フランス

授業料についてはちょっと

日本と違っています。フランスは全部、国立大学ですからフランス国民の税金で授業料が賄われ、大学はほとんど無料でだいたい2万フランぐらいです。それが授業料で、その2万フランの中ではたぶん保険料が一番大きいと思う。ですからみんなな大学に入れます。

大学というのは一番重要ですから別に年齢とかはあまり関係ありません。もちろん一番多いのは18歳の人。1年生なんですけど、大学に戻る人とか、社会人で大学にもう一度入る人もいます。あとは、たとえば英文学を取った人は、英語だけでなく、ほかのビジネスとかも取ったりしています。ですから、卒業するときはふたつの専攻とか専門を持っている人は少なくないと言えます。

ほかの一般大学と前田さんの行ったエセックという大学、それはだいたいフランスの中程度でパリにあります。エナ(国立行政学院)とか3つか4つのグランド・ゼコール(高等専門大学)があって、入学するには競争率が激しくて、2年間の予備校に普通に通います。

またフランスの高等教育の面ではIUT(工業技術短期大学2年制)という学校があります。さらにフランスはEUに属していますから、EU諸国のErasmusプログラムの一環として、ほかのEU諸国の大学に留学できます。

(長田) ありがとうございます。その国ごとに文化の違いや価値観の違いがあるように、教育システムの違いというのがその社会で求める人材の違いに合わせているのかなと思いました。前田さんも言っていたように、グローバル化とともに今後、各国のシステムがどう変わっていくのかというのが興味深いところだと思います。

では、時間の関係上、ここで今日の懇談会を打ち切らせていただきます。ありがとうございます。(拍手)

「国際学生懇談会 in Hiyoshi」に参加して

熊倉敬聡(センター副所長)

一昨年、いまはなき萬来舎のノグチルームで、授業の一環として「萬来喫茶イサム」という一風変わったカフェを催した。やはり萬来舎に入っていた国際センターに通う外国人留学生たちが数多く訪れてくれ、自国の料理などを振舞ってくれた。そのとき、口をそろえて彼らが言っていたことは、せっかく日本の大学に来ているのに、日本人の学生たちと出会う場面が非常に限られている、ということだった。もちろん、国際センターを中心にいろいろな試みがなされていることだろう。にもかかわらず、留学生の実感としては、まだまだ少ないのだ。

「国際学生懇談会 in Hiyoshi」は、そうした状況を改善するための重要な第一歩といえよう。中国、韓国、フランス、ドイツからの留学生たちが、真摯な情熱を込めて、そしてここまで学んできた彼

らの日本語で、自らの留学体験、日本の大学の問題点などを語ってくれた。日本の学生たちも、それに真剣に聞き入り、応答していた。こうしたことが、1回限りのイベントではなく、大学の「日常」として行われていくことを切に望みたい。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.4
交流・連携セクション(担当:小淵昭夫/マリ・ガボリオ)

2004年3月31日発行
代表者 羽田 功

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL: 045-563-1111(代表)
lib-arts@hc.keio.ac.jp
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>